

慶應義塾大学学術情報リポジトリ  
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	J.R.R. トールキンの『指輪物語』と‘things Celtic’
Sub Title	J. R. R. Tolkien’s The Lord of the Rings and ‘things Celtic’
Author	辺見, 葉子(Hemmi, Yoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Hiyoshi review of English studies). No.50 (2007. 3) ,p.69- 87
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20070331-0069">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20070331-0069</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# J. R. R. トールキンの『指輪物語』と ‘things Celtic’

辺 見 葉 子

トールキンの‘English and Welsh’<sup>1</sup>と題された講演は、英語におけるブリトン語／ウェールズ語の要素について考察したものである。講演は1955年10月21日、折しも『指輪物語』の完結篇である『王の帰還』が出版された翌日に行われた。<sup>2</sup>講演の冒頭でトールキンは、『指輪物語』に言及し次のように述べている。

... a large ‘work’, if it can be called that, which contains, in the way of presentation that I find most natural, much of what I personally have received from the study of things Celtic. (p. 163, emphasis mine)

話の枕として言及された『指輪物語』と‘things Celtic’の関係について、また‘in the way of presentation that I find most natural’が意味するところについて、トールキンは講演中には一切説明を加えていないが、この講演が後年（1963年）*Angles and Britons*として出版された際、別の箇所につけた脚注において、‘the names of persons and places in this story were mainly composed on patterns deliberately modeled on those of Welsh (closely similar but not identical)’ (p. 197, n.33)と述べており、これが唯一の彼自身による注釈といえる。「『指輪物語』の人名や地名はウェールズ語のパターンを主にモデルにしている」というのは、より具体的に言うな

らば、ウェールズ語の音韻体系をモデルにトールキンが創造した Sindarin というエルフ語から作られているという意味である。トールキンのエルフ語には二種類があり、もう一方は古典エルフ語とも言うべき Quenya で、これはラテン語をベースにフィンランド語とギリシア語を主要素として創られている。<sup>3</sup> この二つの言語（すなわち Sindarin と Quenya）からトールキンの神話作品中のほぼすべての名前は作られている。<sup>4</sup> トールキンは Sindarin を Quenya と同一の起源から派生しているとしているが、<sup>5</sup>『指輪物語』の時代におけるエルフたちの ‘the living language’ は Sindarin であり、作品中に登場する名前に関しても、この British-Welsh に極めて類似する言語的特徴を付与された Sindarin に由来するものが優勢である。<sup>6</sup>

しかしこれだけでは上の引用におけるトールキンの含意—— ‘English and Welsh’ で展開されるトールキンの ‘British’（ブリトン語）観は、『指輪物語』の世界に具体的に重ね合わされるものであること——を理解するには不十分であろう。

## 1. トールキンの ‘British’ 観

最初に、ここでトールキンが ‘things Celtic’ と言っているものの実体を確認しておくべきだと思われる。これは具体的には、古代ブリトン人の言語であったブリトン語 (British)、すなわちブリテン島における言語の最古層としてのケルト語にまつわる事柄である。‘Celtic’ という言葉の用法としては、きわめて言語学的、かつこの講演のコンテクストに限定されたものであると言えよう。<sup>7</sup> この講演では ‘Celtic’ = ‘British’ の意味で使われているわけだが、この British という言葉がまたきわめて混乱を招きやすいため、少々整理しておく必要がある。まずは *OED* における ‘British’ の定義を見てみよう。<sup>8</sup>

1. a. Of or pertaining to the ancient Britons. Now chiefly in ethnological and archæological use.

- b. Of or pertaining to the Celtic (Brythonic) language of the ancient Britons, later, =Welsh, occas. Cornish. Also as *n*.

‘English and Welsh’におけるトールキンの‘British’という言葉の用法もほぼこれに準じている。ただし1-bに関してはトールキンの用法はより厳密で、ケルト言語学者 Kenneth H. Jackson の定義に準じたものである。トールキンは1963年の出版の際につけたいくつかの註では Jackson の1955年の著作に言及しているが、講演を行った1955年の時点で彼が準拠した定義は、Jacksonによる1953年出版の *Language and History in Early Britain*<sup>9</sup>によるものと考えるのが妥当であろう。Jacksonは‘British’を‘a general term for the Brittonic language from the time of the oldest Greek information about it (derived from Pytheas of Marseilles, c. 325 B.C.) down to the sub-Roman period in the fifth century and on into the sixth’<sup>10</sup>と定義し、さらに詳細な区別が必要な場合には‘*Early British*, during the Roman occupation and as far as the coming of the Saxons in the middle of the fifth century’<sup>11</sup>と‘*Late British*, from that time until and including the earlier half of the sixth century’を用いるとしている。<sup>10</sup> Jacksonの言語学上の分類では、したがって‘British’とは‘ancient language’であり、それ以降6世紀末までには‘*Neo-Brittonic* tongues, Welsh, Cornish, and Breton’<sup>11</sup>というそれぞれの‘mediaeval language’に分化したとされている。<sup>11</sup> トールキンの‘British’に関する言語的定義も同様であったと考えられる。

これは、現在一般に我々が‘British’と聞いて思い浮かべる語義とは大きなズレがあるだろう。今日ではBritishといえば、まず「英国の」という意味、つまりイングランド、ウェールズ、スコットランドを統合した「大ブリテンの」の意味が一般的だと思われる。これはOEDの二番目の用法に当たり、ここでの語義の変遷に関する説明はトールキンの認識と重なっている。

2. a. Of or belonging to Great Britain, or its inhabitants. In the earlier instances geographical term adopted from Latin; from the time of Henry VIII frequently used to include English and Scottish; in general use in this sense from the accession of James I, and in 17th c., often opposed to *Irish*; legally adopted at the Union in 1707. Now chiefly used in political or imperial connexion, as *the British army*, *British colonies*, *British India*, etc., *British ambassador*, *consul*, *residents*, etc.; also in scientific and commercial use, as *British plants*, *British butterflies*, *British spirits*.

また、近年 ‘Briton’（さらにその省略形の ‘Brit’）という言葉が、*OED* では ‘British’ の四つ目にあげられている省略用法（すなわち、4. *ellipt.* as n. *pl.* British people, soldiers, etc）と同義に使われるようになり、「ブリトン」すらも「英国人」と同義になってしまったため、ますます混乱を招きかねない状況を呈している。したがって、トールキンの ‘British’ という言葉の用法は、*OED* の 1-a と 1-b の用法に限定され、さらにはより言語学的な定義にもとづいているという事を、確認しておくことが肝要と思われる。トールキンは、それ以外の用法は ‘the misuse of British’ であると断じているのだ。（p. 182）

それでは以上を踏まえて、トールキンの ‘British’ に関する議論を追ってみよう。British（ブリトン語）はブリテン島に外来の言語だが、少なくとも現在のイングランドおよびウェールズの地域（すなわちピクト語という謎の存在が残るスコットランドを除く地域）においては、British 以前の言語の痕跡はまったく残されていない。その意味では、British はブリテン島最古層をなす言語である。紀元一世紀ごろまでには、ブリテン島はスコットランドの中南部フォース川・クライド川以南において、全域が British の言語圏となっていた。（pp. 170~74）この British の末裔が、今日の Welsh（ウェールズ語）である。この系譜を裏付けるように、‘*brettas*’

およびその形容詞形 ‘*brittisc*’, ‘*bryttisc*’ は、古英語期を通じて ‘*Wealas* (*Walas*)’ および ‘*wielisc* (*waelisc*)’ すなわち現在の ‘Welsh’ と同義であった。(p. 182) ‘Welsh’ と同義であったはずの ‘British’ という言葉がなぜ現在の用法のように「英国の」という意味になったのか、その経緯をトールキンは、「統一という目的をもった政府の有害な干渉」の結果生じた混乱だとして糾弾し、‘British’ という言葉の誤用が始まったのは 1603 年、イングランドとスコットランドの王室の統合後のことであり、「共通の名称を欲しがるといふ不必要な欲望によって、イングランド人は ‘Englishry’ を公式に奪われてしまったし、ウェールズ人は British (ブリトン人) というタイトルの第一継承者としての権利主張を奪われてしまった」としている。(p. 182) これは彼のウェールズ語観とも直結するものである。ウェールズ語が、ブリテン島における最古層の言語である ‘British’ の末裔であるという歴史的な位置づけは、彼にとっては極めて重要な意味をもっていた。

## 2. ブリテン島の<sup>いにしえ</sup>古の言語

トールキンは、ウェールズ語が重要だと思ふ理由として、‘Welsh is of this soil, this island, the senior language of the men of Britain; and Welsh is beautiful’ と言っている。(p. 189) 非常に主観的に聞こえる発言だが、言語が美しいということと、それが古の、土壌に根ざした言語であるということは、トールキンの中では分ちがたく結びついていたのである。

まず、‘Welsh is of this soil, this island, the senior language of the men of Britain’ という部分であるが、これをトールキンは次のように説明している。British はこの島に入ってきた時、‘an archaic state’ にあり、よって非常に古代的な言語、複雑な語形変化を持ち、西インド＝ヨーロッパ語派の中でもそれと分かる特徴を持つ言語から、中期そして現代の言葉へと変化するその全過程は、この島で起こった。British は、ずっと昔にブリテン島の環境に順化し、その土地のものになった (naturalized) のだ。ブリテン島の土地において「齢を重ねた」言語だといえる。英語が最初に

British の所有権を侵害しにやって来た時、それはすでに実質的に「土着の」もの (indigenous) になっていたのである。(pp. 176-77)

ではこのようなウェールズ語が「古の、土壌に根ざした言語である」という認識と、「ウェールズ語は美しい」という発言とはどう結びつくだろうか。

### 3. ‘Native language’ としての British-Welsh

ある言語を美しいと感じ、そこに悦びを見出すのはなぜか、という分析不能と思われる問題について、<sup>12</sup> トールキンはきわめてユニークかつ興味深い ‘native language’ に関する持論を展開している。ただしここでも彼の言う ‘native language’ とは、われわれが一般に考えるものとは全く異なる。トールキンによれば、「われわれは誰もが自分の ‘native language’ を持っているのだが、それはわれわれのしゃべる言葉、つまり子供のとき最初に学んだ言葉 ‘cradle-tongue, the first-learned’ ではない。言語的にわれわれはみな出来合いの服を来ているようなもので、われわれの native language はめったに現れ出てこない……でも埋もれてしまっているかもしれないが、けっして完全に消滅してしまっただけではなく、他の言語との接触を機に深く呼び起こされるかもしれない。」(p. 190)

続いてトールキンは彼自身の言語遍歴、言葉の美しさから受ける悦びを語る。(pp. 191-93) 彼の場合、まず cradle-tongue は英語、二つ目がラテン語そしてフランス語、この二つは母親のエディスが幼いトールキンに教えたもので、彼は特にラテン語から受けたセンセーションは記憶に鮮烈だと回想している。次にギリシア語に魅了されたが、ギリシア語の魅力は古代性と遠さにあって、心の核心に触れることはなかった。それからスペイン語、これは他のどんなロマンス語よりも強い悦びを与えてくれた。そしてゴート語。これは彼が初めて出会った古のゲルマン語で、心を奪われた最初の言葉だった。彼はゴート語の言葉を作り出そうとした。他にもいろいろ異なる言語の味見をしたが、もっとも圧倒的な悦びを与えてくれたのは

フィンランド語であった。しかし最終的に勝利をおさめたのは、子供の頃その語形を見て魅了されたウェールズ語で、後に大学に入ってから中世ウェールズ語を学んだ。これが彼に与えた悦びは分析しがたいものだが、あるスタイルを持っていると感じられる語形を受け止めた時、そしてその語形から受け取ったものではない意味をそれに帰する時、そういう連想の瞬間にこの悦びは最も鋭く感じられる。このような嗜好や偏愛というものは——これは最初に学んだ言語とは違う言葉との接触によって明らかになるものだが——個人の性向の一面であり、それは歴史的に形成されるものだから、こうした偏愛も歴史的につくられたものにちがいない。自分がウェールズ語の言語スタイルに感じる喜びは、イングランド人の中で自分だけに特別なものだとは思えない。多くのイングランド人の中に眠っていて、それはもしかしたら、その起源であるケルト語のパターンがかすかに響くアーサー王ロマンスの中の名前に触れた時に呼び醒まされるかもしれないし、もっと機会があれば鮮明に自覚されるようになるかもしれない。なぜなら '…we are still "British" at heart. It is the native language to which in unexplored desire we would still go home.' (p. 194, emphasis mine) と結んでいる。

トールキン自身を含めたブリテン島に住むイングランド人の遺伝子の奥深く淵源にはブリトン人としての深層、その言語であるブリトン語という深層が埋め込まれていて、ブリトン語の末裔であるウェールズ語に触れることによってその根源的な層が喚起された時、それを「美しい」と感じ、「悦び」を感じるというわけである。英語における British-Welsh の要素に関する考察の講演において展開された、この 'native language' としての 'British' という自説の「証拠」として、トールキンは次のように述べている。自分の『指輪物語』の人名や地名は、主にウェールズ語のパターンを意識的にモデルにして創ったので、作品の他の何よりも読者〔ブリテン島の読者ということになるが〕には悦びを与えたかもしれないというのである。(p. 197, n.33)



先の引用（下線部）では‘in unexplored desire’と言っていたが、『指輪物語』を「証拠」として引き合いに出したということは、トールキンにとっては『指輪物語』がまさにこの願望を explore したものであったのだと考えられよう。

#### 4. 『指輪物語』における言語世界

<sup>ミドル・アース</sup>中つ国の「もの言う」生き物は人間だけではない。その言語世界は実に多種多様であるが、ここでは本稿の議論に直接関連するものだけを扱う。トールキンは『指輪物語』の言語世界において、どのように British-Welsh を組み込み位置づけているのだろうか。

##### (1) エルフの言葉

そもそも彼の神話は、エルフ語という彼が創造した言語が存在する世界を構築するために書かれたものであった。<sup>13</sup> エルフは<sup>ミドル・アース</sup>中つ国において人間よりも先に目覚め、不死の定めであるため太古から存在しつづけている古の民であるが、『指輪物語』に登場するその言語は Quenya と Sindarin の二種類がある。前述したように、British-Welsh をモデルに創られているのが Sindarin である。

トールキンの遺稿からは、エルフ語の起源、その分岐発展の経緯について、さまざまなヴァージョンが存在したことが分かるが、これらはエルフ族の分岐の過程に関する彼の考えの推移と連動している。<sup>14</sup> ここでは『指輪物語』の Appendix F および『シルマリルの物語』のヴァージョンにもとづき、エルフ語の歴史をごく簡単に概観してみよう。

エルフたちが<sup>ミドル・アース</sup>中つ国において目覚めた時、<sup>ミドル・アース</sup>中つ国は Melkor という墮神の大いなる影に覆われていたため、神々はエルフたちの身を案じ、Oromë という森を司る神の先導により、<sup>ミドル・アース</sup>中つ国の西方の海のかなたにある神々の国へと避難させた。Oromë の召集に応じたエルフたちは the West-elves または the Eldar（「上のエルフ」）と呼ばれる。Oromë に

導かれて渡った神々の国で、古典エルフ語とも言うべきエルフの共通語 Quenya が成立し、またエルフと神々との会話にもこの Quenya が用いられた。その意味で Quenya は神々の国の言葉と言えよう。最古の書き記された言語である。一方、エルフのうち Oromë の召集に応じなかった者は the East-elves と呼ばれるが、かれらの言語は作品には登場しない。<sup>15</sup> ただし後で述べるように、人間はこの the Dark Elves と呼ばれるエルフたちから言葉を学んだとされている。<sup>16</sup> Oromë の召集に応じた上のエルフの中にも、the Misty Mountains を西へ越えたものの神々の国へと大海を渡らず、<sup>ミドル・アース</sup>中つ国の最西、ベレリアンドの沿岸地方に留まったエルフたちがいた。「灰色のエルフ」(the Grey-elves) と呼ばれる彼らの王は、神々の国の二本の聖なる世界樹の光を仰ぎ、したがって自身は「光のエルフ」<sup>17</sup> である Thingol (‘Grey mantle’ の意) であり、彼の妃はその <sup>かんばせ</sup>顔に神々の国の二本の樹の光が映し出された Melian<sup>18</sup> であった。彼らの言葉は、すべてが <sup>ミドル・アース</sup>移ろいゆく中つ国の定めとして大きな変化を遂げ、神々の国へと渡って行った同胞たちが形成した Quenya とは隔たりのある言葉となった。これが Sindarin であり、ゆえに Sindarin は <sup>ミドル・アース</sup>中つ国に土着の古の言葉である。神々の国に渡った上のエルフたちのうち、第一紀の末に <sup>ミドル・アース</sup>中つ国へと戻って来たエグザイルのエルフたちは、Quenya を <sup>ミドル・アース</sup>中つ国へともたらしたが、<sup>ミドル・アース</sup>中つ国に流布する Sindarin を日常語として取り入れたため、Sindarin は <sup>ミドル・アース</sup>中つ国のエルフたちに広く共有される言葉となり、一方 Quenya は上のエルフたちの典礼、伝承の言葉として受け継がれた。Quenya と Sindarin はまた、古のヌメノール王国の系譜につらなる Gondor 諸侯国においても知られており、Gondor 王国内のほとんどすべての地名人名は、エルフ語の語形と語義を持っていた。

## (2) 人間の言葉

第三紀の終焉を描く『指輪物語』は、『赤表紙本』(The Red Book) の写本を、現代英語に「翻訳」したものであると想定されている。写本

の言語は、かつて第三期のミドル・アース中つ国の西方諸国で用いられていた共通語（‘Common Speech’）／西方語（the Westron）である。トールキンは、自身をこの『赤表紙本』写本の編者・翻訳者と位置づけている。Westronは、元来人間の言葉であるが、第三紀を通じてミドル・アース中つ国のほぼ全域において、エルフを除くほとんどすべての種族の母国語として用いられていた。この祖語は、Edain（「人間の父たち」と呼ばれる、「エルフの友」である人間の三つの家系に属する人間たちが用いた言葉（the Adûnaic）である。『シルマリルの物語』によれば、原初の人間たちはその言葉の多くを the Dark Elves から学んだという。ここで the Dark Elves と呼ばれているのは、Appendix F では the East-elves と呼ばれている、神々の召集に応じなかったエルフのことだが、<sup>19</sup> エルフ語の起源は一つであるから、ミドル・アース中つ国に戻ってきた上のエルフ Finrod Felagund がベレリアンドの地で人間（Bëor とその一族）に遭遇した時、彼らの言葉がエルフ語に近かったため、ほどなく会話を交わすことが出来るようになったという。<sup>20</sup> また Edain は Sindarin にも堪能になった。彼らは、第一紀の終焉、Melkor/Morgoth と神々との戦いに際して神々のために戦った功績への報酬として、ミドル・アース中つ国の西方の海にヌメノールの島を与えられた。半エルフの Elros を初代の王として戴いたこの人間の王国ヌメノールでは、Sindarin は伝承の学として伝えられ、さらに知者・賢人たちは Quenya をも習得し、地名や人名に用いた。ヌメノール人たちの自国語は父祖代々使われてきた人間の言葉である Adûnaic であったが、この Adûnaic は王国の最盛期、ヌメノール人たちが港や要塞を築いたミドル・アース中つ国の西沿岸地方で話されるようになり、ミドル・アース中つ国の人間たちの言葉と混ざり合い、ヌメノールとかかわりを持つすべての人々の間に広まり、ミドル・アース中つ国の‘Common Speech’/Westron となった。ヌメノールがアトランティスさながら海底に沈んだ時、Elendil 率いる「エルフの友」たる一握りのヌメノール人は、ミドル・アース没落を逃れて中つ国へ戻り王国を築いたが、彼らはエルフ語に由来する言葉で Westron を豊かにし、その品格を高めた。したがって Westron は、その淵源を辿れば Dark Elves の言葉に出会い、

そして Sindarin や Quenya にも影響された、エルフ語とゆかりの深い言葉だということになる。

### (3) ホビットの言葉

ホビット固有の言語は記録に残っていない。ホビットと人間は近い関係にあり—— ‘The Hobbits are, of course, really meant to be a branch of the specifically *human* race (not Elves or Dwarves) — hence the two kinds can dwell together (at as Bree), and are called just the Big Folk and Little Folk’<sup>21</sup> ——ホビットは常に自分たちの周りにいる人間の言葉を使っていたと考えられている。『指輪物語』の時代のホビットは、Westron を用いるようになって一千年も経っていた。ホビットの故郷は東の Wilderland, 特に the Anduin Valley であった。ここはローハンの民の祖先である the Éothéod の住処でもあったので、Westron を使うようになる前のホビットは、ローハンの民の祖先が使っていたこのアンデュイン上流域の人間の言葉を使っていた。ローハンの民はこの祖先伝来の言葉を守って用い続けてきたため、ホビットの古い言葉の名残のある言葉には、ローハンの言葉との類似が認められる。アンデュイン上流域の人間は、the Éothéod も含め、第一紀の Edain またはそれに近い血筋の者たちの子孫であり、よってこの北方の言葉は Westron の祖語である Adûnaic と関係があった。現代英語に翻訳されている『指輪物語』の時代におけるホビットの言葉 (Westron) との関係を表すために、トールキンはローハンの言葉を古英語に翻訳している。古英語に翻訳することにより、ローハンの民と Edain との関係も示唆されている。<sup>22</sup>

しかし、本稿にとってのかかわりが深いのは、ホビットの名前や地名の中で異色を放つ、the southern Stoors の言葉である。ホビットの三種族の中の Stoors は、第三紀の 1150 年頃、the Misty Mountains を西へと越えて、the Angle または Dunland へと移住してきた。<sup>23</sup> The southern Stoors とは Dunland へ移住した者たちである。彼らは移住先の Dunland

では、そこに住む人間 (the Dunlendings) の言葉 (Dunlendish) を使うようになった。Dunlendings はもともとは the White Mountains の谷間地方に住んでいた人間たちで、その言葉は Adûnaic とはごく微かなつながりしか持たない異質なものであった。Dunland の Stoors は、第三紀の 1630 年頃ホビット庄に移り住み、『指輪物語』の時代、Stoors は Marish と Buckland に多かったので、この地域の言葉には Dunlendish に由来する言葉が残っていた。また Dunlendings の一部は、冥王 Sauron の力が絶大であった第二紀の暗黒時代に the Misty Mountains の南の谷々へ、そこからさらに北方の the Barrow Downs まで移り住んだのだが、この子孫が Bree の人間たちである。ゆえに Bree の人間の言葉にも Dunlendish の名残が認められる。

The southern Stoors のホビットの言葉や Bree の人間の言葉には、こうして Westron とは系譜を異にする Dunlendish の名残があるわけだが、この異質な言語の存続状況を表現するにあたって、トールキンは、イングランドに残るケルト語 (= British-Welsh) の要素が類似した様相にあるとして、<sup>24</sup> Dunlendish の名残をとどめる言葉の「翻訳」にあたって、どこか ‘Celtic’ な (ケルト語的な = British-Welsh を想起させる) スタイルを持たせた。<sup>25</sup> たとえば Brandyback 家の始祖の名前 Gorchendad Oldbuck の Gorchendad の部分は、「曾祖父」を意味するウェールズ語である。<sup>26</sup> 他にトールキンが Appendix F で例にあげているのは、Bree, Combe (Coomb), Archet, Chetwood という Bree-land の地名で、*breë* ‘hill’, *chet* ‘wood’ という ‘relics of British nomenclature’ にもとづいて創られた名前であると明かしている。Combe に関しては言及していないが、これは Welsh *cwm* ‘narrow valley’ に辿ることが可能である。<sup>27</sup> なお *breë*, *combe*, *chet* は、すべて British にまで起源を辿ることが仮定でき、現代ウェールズ語に *bre*, *cwm*, *coed* として残る言葉である。<sup>28</sup> Jackson によれば、それぞれ次のような変遷を辿っている。

- British *\*brigā* ð> Late British *\*breza* > Welsh, Cornish, and Breton *bre*<sup>29</sup>
- British *\*cumbo-* > Primitive Welsh *\*cumb* > Welsh *cum*; occurs in numerous place-names in *coombe*, and has become a common-noun in English.<sup>30</sup>
- British *\*caito-*, later *\*cēto-* > Primitive Welsh *\*cēd* > Welsh *coed*<sup>31</sup>

現存の地名として、*\*Breza* は、たとえば Worcestershire の Bredon にも認められるが、これは *\*breza* と、この British の要素を説明する古英語の *dūn* ‘hill’ との組み合わせである。さらに Leicestershire の Breedon on the Hill のように、British, 古英語, 現代英語と三層に渡る ‘hill’ の意味の語を持つものもある。Brewood という Staffordshire の地名の場合も同様で、*\*breza* と古英語 *wudu* ‘wood’ から成っている。<sup>32</sup> この古英語 *wudu* ‘wood’ と Primitive Welsh *\*cēd* との組み合わせが、Buckinghamshire にある Chetwode である。Archet に関しては、Dorset に *Archet* という Anglo-Saxon 時代の地名があり、Primitive Welsh *\*Argēd* に辿れるのだが、現在は East Orchard となっていて、British の要素は現在の地名からは姿を消してしまっている。<sup>33</sup> このように、ブリテン島における最古層言語としての British は、英語の中に *relics* として認められるのだが、これを共通語となった Westron とは異質な Dunlenish の *relics* になぞらえているわけである。

##### 5. 中つ国<sup>ミドル・アース</sup>における ‘native language’ と ‘British’

以上見てきたように、『指輪物語』には、Westron が ‘Common Speech’ として様々な種族に用いられていた中つ国<sup>ミドル・アース</sup>における、幾重もの言語層が描かれている。これに ‘English and Welsh’ の講演においてトールキンが打ち出した、ブリテン島の ‘native language’ としての ‘British’ という概念を重ね合わせて見れば、‘British’ に相当するものとして描かれているの

が、<sup>ミドル・アース</sup>中つ国における最古の言語層に属するエルフ語であることは一目瞭然であろう。しかしエルフ語は、<sup>ミドル・アース</sup>はたして中つ国の人間／ホビットにとっての‘native language’と見なせるのだろうか。ここで思い出したいのは、太古の人間たちは the Dark Elves から言葉を学んだという設定である。このエルフ語は、Quenya や Sindarin とは系譜を異にするが、いずれにせよ、エルフ語の起源は一つであるから、人間の原初の言葉は、エルフ語との出会いに始まったわけである。そして Westron は、発展の過程で Quenya や Sindarin の要素を大いに取り込んでいる。<sup>ミドル・アース</sup>中つ国の人間／ホビットにとっても、エルフ語は‘native language’として想定されていると言えよう。トールキンは、‘But though it [native language] may be buried, it is never wholly extinguished, and contact with other languages may stir it deeply’ (p. 190) と述べているが、『指輪物語』には、ホビットにとってもエルフ語が‘native language’であり、深層部に眠る言語であることを示唆していると解釈できる場面がある。エルフ語の素養のないホビットの Sam が、大蜘蛛の Shelob に今にも押しつぶされようとしていた刹那、Galadriel の玻璃瓶 (Eärendil の星の光を集めたものであり、したがってトールキンのエルフ語による神話創造の原点の象徴とも言える)<sup>34</sup>に触れると、かつて耳にしたエルフ語のフレーズ (*Gilthoniel A Elbereth!*) が記憶に蘇る。すると彼の知らないはずの言葉が声を得て、口からほとぼり出たのである。

And then his tongue was loosed and his voice cried in a language which he did not know:

*A Elbereth Gilthoniel  
o menel palan-diriel,  
le nallon sí di'nguruthos!  
A tiro nin, Fanuilos!*<sup>35</sup> (emphasis mine)

これは Sindarin である。Sam とちがってエルフ語の教養のあるホビット

の Frodo が、同様の状況のもと Galadriel のガラス瓶を手にした時、我知らず叫んだ ‘*Aiya Eärendil Elenion Ancalima!*’<sup>36</sup> は Quenya であった。どちらもホビットの ‘native language’ としてのエルフ語が呼び醒まされた瞬間を描いている、と読めるのではないだろうか。<sup>37</sup>

## 註

- 1 J. R. R. Tolkien, ‘English and Welsh’, in *Angles and Britons: O’Donell Lectures* (Cardiff: University of Wales Press, 1963), pp. 1–41. Reprinted in Tolkien, *The Monsters and the Critics and Other Essays*, ed. Christopher Tolkien (London: George Allen & Unwin, 1983), pp. 162–97. 本稿での引用のページ数は後者のものである。
- 2 Humphrey Carpenter, *J. R. R. Tolkien: A biography* (London: George Allen & Unwin, 1977), p. 223.
- 3 *Letters of J. R. R. Tolkien*, ed. by Humphrey Carpenter (London: George Allen & Unwin, 1981), p. 176.
- 4 *Letters*, p. 143.
- 5 この問題に関しては、伊藤盡『指輪物語 エルフ語を読む』（東京：青春出版、2004）, pp. 35–37 を参照。
- 6 *Letters*, p. 176.
- 7 トールキンはこの ‘English and Welsh’ で、1980 年代以降（日本ではごく近年）議論となっている ‘Celtic’ の概念、Celticism の問題に言及しており、言語学者らしく非常に早い時期における問題指摘であったわけだが、これに関しては別稿でも少々触れたこともあり、ここでは扱わない。Cf. 拙稿「『ケルト』神話とファンタジー」、『月刊言語——特集 ファンタジーの詩学：想像力の源泉をたずねて』、2006 年 6 月号, pp. 29–37.
- 8 *Oxford English Dictionary*, 2nd edn on CD-ROM, version 3.1.
- 9 Kenneth Jackson, *Language and History in Early Britain: a chronological survey of the Brittonic Languages 1st to 12th c. A.D.* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 1953).
- 10 Jackson, p. 4.
- 11 Jackson, p. 5.
- 12 Cf. Ross Smith, ‘Fitting Sense to Sound: Linguistic Aesthetics and Phonosemantics in the Work of J. R. R. Tolkien’ in Douglas A. Anderson, Michael D. G. Drout and Verlyn Flieger eds., *Tolkien Studies*, vol.III (Morgantown: West Virginia University Press, 2006), pp. 1–20.



- 13 *Letters*, p. 264.
- 14 トールキンの遺した ‘The Lhammas’ には、初期段階における彼のエルフ語の evolution に関する考察の経緯が記されている。J. R. R. Tolkien, ‘The Lhammas’ in *The Lost Road and Other Writings: Language and Legend before ‘The Lord of the Rings’*, ed. by Christopher Tolkien (London: Unwin Hyman, 1987), pp. 167–198. ‘The Lhammas’ には三種類のヴァージョンがありさまざまな異同があるのだが、エルフ語の起源に関しては、エルフ語は神々 (Valar) の言葉 Valarin から派生し、Valar の一人 Oromë から伝授されたものであるという点において一致している。一方後の『シルマリルの物語』では、エルフたちは中つ国で目覚めると言葉を使い始め、目にとまったものに名前を与えたとされている。J. R. R. Tolkien, *The Silmarillion*, ed. by Christopher Tolkien (London: George Allen & Unwin, 1977), p. 49.
- 15 Appendix F, p. 405. トールキンはここで East-elves に Silvan Elves を含めているようだが、『シルマリルの物語』における分類では、Silvan Elves は召集には応じたものの the Misty Mountains を西へ越えることのなかった Nandor の系統だとされ、よって Eldar に含まれる (*The Silmarillion*, p. 309).
- 16 ‘Moriqendi’, ‘Elves of the Darkness’ とは、神々の国の二本の樹の光を仰ぎ見なかったエルフのことなので、召集に応じなかった ‘Avari’ だけでなく、神々の国に行き着かなかった Eldar も含まれる。ただし人間が最初に言葉を学んだ ‘Dark Elves east of the mountains’ (*The Silmarillion*, p. 141) とは、‘Avari’ のことである (*ibid.*, p. 104.)
- 17 ‘the Elves of the Light’. Cf. *The Silmarillion*, p. 56.
- 18 *The Silmarillion*, p. 58.
- 19 Cf. 註 16.
- 20 *The Silmarillion*, p. 141.
- 21 *Letters*, p. 158, †.
- 22 Tolkien, *The Return of the King* (London: George Allen & Unwin, 1955), Appendix F, p. 414; Ruth S. Noel, *The Languages of Tolkien’s Middle-earth* (Boston: Houton Mifflin, 1974, 1980), pp. 15–18; 伊藤, pp. 77–79.
- 23 *The Return of the King*, Appendix B, p. 366.
- 24 Tolkien のこの発言の分析は Jackson, *op.cit* の議論との比較も含め、別稿に譲りたい。
- 25 Appendix F, pp. 413–14.
- 26 J. R. R. Tolkien, ‘Guide to the Names in *The Lord of the Rings*’, in Jared Lobdell ed., *A Tolkien Compass* (New York: Ballantine, 1975), p. 183.
- 27 Jackson, p. 510.

- 28 ただし ‘bre’ は、現在では obsolete. Cf. H. Meurig Evans and W. O. Thomas, *Y Geiriadur Mawr: The Complete Welsh-English English-Welsh Dictionary* (Christopher Davies, 1989), p. 53.
- 29 Jackson, p. 445.
- 30 Jackson, p. 510.
- 31 Jackson, p. 327.
- 32 *A Dictionary of British Place-Names*, p. 74.
- 33 Jackson, p. 327.
- 34 Cf. Carpenter, pp. 64–71.
- 35 *The Two Towers*, pp. 338–39; cf. David Salo, *A Gateway to Sindarin: A Grammar of an Elvish Language from J. R. R. Tolkien's Lord of the Rings* (Salt Lake City: University of Utah Press, 2004), p. 223; Noel, p. 40.
- 36 *The Two Towers*, p. 329.
- 37 トールキンは *The Notion Club Papers* (in J. R. R. Tolkien, *Saruron Defeated*, ed. by Christopher Tolkien, London: Harper Collins, 1992, pp. 145–327) においても、‘visitations of linguistic ghosts’ というテーマを扱っている。

*Synopsis*

J. R. R. Tolkien's *The Lord of the Rings*  
and 'things Celtic'

Yoko Hemmi

In 'English and Welsh', a lecture delivered in 1955 on the British-Welsh elements in English language, Tolkien touched on *The Lord of the Rings* as containing much of what he had personally received from the study of 'things Celtic'. The term 'Celtic' in this particular context denotes 'British', in its strictly linguistic sense, that is, the Celtic (Brythonic) language of the ancient Britons. Tolkien regarded British as an 'indigenous' language of Britain and hence its descendant, Welsh, as 'of this soil, this island, the senior language of the men of Britain'. Based on this view, he proposed a unique concept of 'British-Welsh' as a 'native language' of the people of Britain, including himself, an Englishman, and tried to explain the nature of 'pleasure' Welsh stirred in him. He assumed that the readers might have derived the same 'pleasure' from *The Lord of the Rings* when the Welsh traits were recognized in the names of places and persons of middle-earth, which Tolkien constructed to resemble Welsh phonologically. Tolkien did not further elaborate on this issue in the lecture. However, his views on 'things Celtic' seem to be at the foundation of the very structure of the linguistic world Tolkien created. The paper attempts to examine in detail how his argument on the relationship between British-Welsh and English is mirrored in the language landscape of middle-earth. The Sindarin Elvish, modeled on Welsh phonology, can be easily equated with British-Welsh in

that it constitutes the oldest language stratum of middle-earth. It is necessary to probe into the history of the languages of Men and Hobbits to reveal how Tolkien took pains to demonstrate that the Elvish, which was compared to British-Welsh in Britain, could be regarded as a 'native language' of the peoples of middle-earth.